

特定領域研究

実験社会科学ニュースレター

発行日 2008年8月6日

目次：

市場班	1
組織班	2
政治班	
社会班	3
意思決定班	
集団班	4
文化班	
理論班	5

ヘッドライン

本号では、特定領域「実験社会科学」ニュースレター第一号として、各班の班長より、班紹介をさせていただきます。

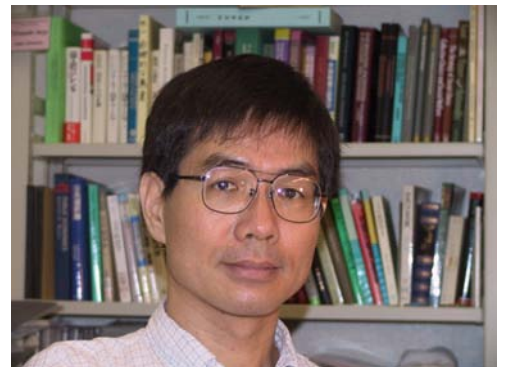
市場班

「市場とは何か？」が市場班の大きなテーマです。市場班には主に3つのチームがあり、緊密に連携をとりながら研究を進めています。

早稲田の広田チームのテーマは、「バブル」です。昨今、原油価格の高騰は「バブル」ではないのか、などの議論がありますが、広田チームでは、ファンダメンタルズを完全に知っているトレーダーとそうでないノイズトレーダーを準備し、どのような環境でバブルが起こるのかを探り始めています。「実需なきプレイヤーは市場を去れ」などの議論がある中で、広田チームの研究は、安定化を目指す市場メカニズムのデザインに貢献することになるでしょう。

信州の西村チームのテーマは、「オークション」です。とりわけ、日本人の主食であるお米の入札方式に関する理論と実験研究を開始しています。米のオークションには、売り手の価格および数量維持を狙う特殊な仕組みがあり、この理論と実験の性能の分析が始まっています。また、「いじわる」動機がセカンド・プライス・オークションの理論と実験に大きな役割を果たすこともわかりはじめています。

大阪の西條チームは、公共調達に注目しています。公共調達においては、入札者のほぼ全員があらかじめ決められた最低価格そのもので入札を行う結果、抽選で勝者が決まることが多いのです。これでは各社の本来の技術力などが入札に反映されません。そこで、新たな手法が日欧で開発されています。これらの仕組みのパフォーマンスを知るため、理論分析・被験者実験・コンピューターシミュレーションを開始しています。



班長 西條 辰義

大阪大学社会経済研究所

組織班

私たち組織班の研究目的は、企業組織の「組織間関係」と「組織学習」における意思決定過程の構造を解明することと評価することです。研究分担者のディシプリンは経営経済学（磯辺、下村）と会計学（山地、後藤）と2種類あり、企業組織に対して異なる視点から分析を試みたいと考えます。さらに私たちは、企業組織の行動の理論予測と実験データとの比較研究を行うことを計画しており、2008年度から新たにビジネスゲームの専門家2名（又賀、小笠原）を連携研究者に加えました。ビジネスゲームは経営経済学と会計学の両者の実験に有用であると考えたからです。

私たちは、企業組織の現実の状態と望ましい状態の本質が何かをなるべく単純な理論と実験で見つけられればと考えています。現在はまず企業組織の行動を表現するモデルを、これまでの経営経済学・会計学の知的財産（たとえば不完全競争やコーポレートガバナンスのモデル）を基礎として、単純かつ本質を失わぬように慎重に構築中です。次に行うことは各企業が完全に合理的な一主体ならば、そのモデルの中ではどのような選択を行なうかを理論的な計算により予測することです。最終的には被験者を使った組織行動の実験を理論予測と比較検討することを計画しています。



班長 下村 研一
神戸大学経済経営研究所

私たちは、なるべく単純な理論と実験を用い上記のプロセスを手堅く踏むことで、企業組織研究という社会科学研究の一端につき「小さな総合化」を試みたいと考えています。

政治班

政治学における計量実証研究は、これまで有権者対象の社会調査を行ったり、選挙から得られた投票データを用いたりして進められてきました。実際の政治行動を理解するためには、実際のデータを用いて分析する必要があるからです。それでは、実験室に被験者を集めて仮想的な選挙を行ってみることは、実際の政治行動を理解するうえでどの程度役立つのでしょうか。近年、実験室実験の論文が政治学の主要学術誌に多く掲載されるようになってきており、肯定的な意見が増えているようです。

この流れを受けて、政治班では現在3種類の実験研究を進めています。1つは、インターネット上での質問調査に実験的手法を導入し、候補者などに関する情報を与える回答者グループと与えない回答者グループを作り、2つのグループ間の回答の差を見ることで情報の効果を見出そうとする研究です。現実にもっとも近い実験といえましょう。2つめは、実験室に被験者を集めて、さまざまなルールのもとで投票してもらい、投票のルールが投票行動にどのような影響を与えるかを観察する研究です。社会科学の実験研究の多くは現在このタイプです。3つめは、脳をスキャンする装置（fMRI）を用いて、選挙キャンペーンCMを観た被験者の脳の活動を観察する実験です。被験者の行動を理解するのに脳の活動を見ようという画期的な発想で、最先端の実験研究といえます。これらを実施するために、政治班には政治学者、経済学者、そして脳神経科学者が所属しています。

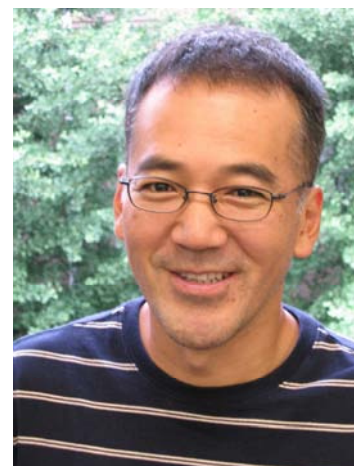


班長 肥前 洋一
北海道大学大学院公共政策学連携研究部

社会班

「みんなががんばっているから、自分もがんばろう」、「みんなががんばっているから、自分はちょっと楽をしよう」。誰もがこんなことをしたことがあると思います。前者は「協力」と呼ばれ、後者は「ただ乗り（フリーライド）」と呼ばれる行動ですが、われわれは無作為に「協力」や「ただ乗り」を選んでいるわけではありません。また、確かに、いつも協力する人もいれば、いつもただ乗りを狙っている人もいるかもしれませんが、そういう人は例外的です。大抵の人は、その時々状況に応じて協力したりただ乗りしたりしているのではないのでしょうか。

人々に協力やただ乗りを促す条件として、近年、「社会関係資本 social capital」と呼ばれるものが注目されています。皆さんもこのような「社会関係資本」があることは身近に感じていると思います。例えば、人々の関係性の疎密や暗黙のルールの存在などが、そのような「資本」に含まれていそうです。もちろん、感じているだけでは科学的な研究とは言えないので、われわれはこの感じを、実験によって具体的に明らかにしようとしています。この「資本」を明らかにすることで、職場や地域での協力活動を活性化したり、ひいては社会全体の効率性を高めることができれば、と考えています。



班長 清水和巳
早稲田大学政治経済学部

意思決定班

本班には、研究分担者として、慶応義塾大学文学部坂上貴之教授、東京工業大学大学院理工学研究科藤井聡教授がいます。坂上氏は、これまでハトなどの動物の選択行動、人間の意思決定研究を行っておられ、藤井氏は、これまで交通工学、社会心理学、意思決定の分野で研究をされています。私はこれまで意思決定研究を続けてきましたが、藤井氏とはこの10年近く社会的判断や意思決定について共同研究をしています。研究分担者以外にも、慶應義塾大学、東京工業大学、早稲田大学の大学院生や関係者が研究協力をしてくれています。全員が都内の大学に通っていますので、比較的会合の機会をもちやすく、研究の進展報告会や研究打ち合わせ頻繁に行っています。



班長 竹村和久
早稲田大学文学学術院

本研究プロジェクトでは、必ずしも経済合理的ではなく時には一貫しない人間の意思決定過程の特徴を、人間を含む動物に関する行動分析学の視点と行動意思決定論の視点を統合しながら把握することを目的としています。具体的には、社会的状況における意思決定の微視的過程を種々の基礎心理実験と調査を通じて研究しています。昨年度は、非接触型の眼球運動測定装置および付属システムを今回の研究費で購入させていただき、意思決定過程における注視の変化をかなりの程度微視的に捉える研究ができるようになりました。一般の方を対象にしたワークショップもこれまで2回行いましたが、また、行う予定にしておりますので、その節は是非ご参加いただけますようよろしくお願いします。

集団班

人間の社会を、近縁の霊長類社会から区別するもっとも重要な特徴の1つは、社会規範の存在でしょう。社会規範とは、「一すべし」、「一であるべき」といった、集団の成員に共有された信念・期待のことを指します。私たち人間はこうした規範をもつことによって、ばらばらの個人としてではなく、まとまりをもつ集団として振る舞うことができます。ヒトという種の成功が、こうした大規模な集団行動に大きく依存してきたことは言を俟たないでしょう。しかし、規範がどのように、また、なぜ成立するのかという問いは、理論的にも経験的にも一筋縄では行かない問題です。

私たち集団班は、心理学（亀田）・社会学（高橋）・社会心理学（神）・数理生物学（中丸）といった異なるバックグラウンドをもつ研究者が集まり、集団規範を可能にする感情・認知・行動のメカニズムを明らかにしていきたいと考えています。近年、感情を含むヒトの広義の認知システムは、社会・生態的な環境への適応戦略として理解可能であるという考え方が生まれています。私たちの研究では、この考え方に立脚しつつ、規範を支える心的システムについて、①心理学・神経科学を軸とする実験、②社会学を軸とする観察、③数理生物学を軸とするモデル化を試みたいと考えています。これらの共同の試みを通じて、社会科学の基礎となる人間像に向けて有意義な知見を蓄積することを目指しています。



班長 亀田 達也

北海道大学大学院文学研究科

文化班

文化班における研究の目的は、これまで“文化”の違いとして理解されてきた認知・信念システムの集団差ないし社会差が、異なる“制度”（すなわち、自己維持的信念・誘因結合体）への適応行動としてより適切に理解できること、すなわち、人間の本質的社会性が、異なる制度（人々の適応行動により形成・維持される誘因構造）への適応を促進するための「文化・心理的道具」として働いていることを明らかにすることを目的として、これまで一連の実験研究を実施してきました。そのため、集団班と共同で、学生ではなく一般市民からの被験者プールを作成し、同じサンプルに対して各種の実験（心理尺度の測定を含む）を2年間にわたり繰り返し実施する研究を開始しています。この研究を含めたこれまでの実験研究では、①従来の文化心理学において文化的自己観の違いに基づくとされてきた同調行動が、実は特定の制度の下でのデフォルト適応戦略として理解されるべきであること、②最後通告ゲームで公正な提案を行う人は、自身が不公平な提案に直面するとより大きな感情の表出を行うこと、③実験用コンピュータ画面に（集団内での他者からの監視の手がかりとなる）歌舞伎役者の目を表示すると、独裁者ゲームで内集団成員に対する分配額が増加するのに対して、外集団成員に対する分配額は増加しないこと、などをはじめ、制度への適応行動に関する多くの知見が得られています。

また、東アジアにおける国際共同実験ネットワークの整備を進めるための国際ワークショップ（2007年）、心の文化差の解明を脳神経科学との共同により進めるための国際シンポジウム（2008年）などをはじめとする一連のワークショップやシンポジウムを開催し、国内外の研究者との研究交流を進めると同時に、共同研究体制の確立をめざしています。



班長 山岸 俊男

北海道大学大学院文学研究科

理論班

理論班は、他の班とは異なり、一つの研究テーマや研究対象に取り組む研究者の集まりという風にはなっていません。班員の研究分野は、法哲学（井上）、経営学（伊藤）、経済学（青柳）、そして進化生物学（巖佐）と本当に多様です。理論班は、実験社会科学に関連したさまざまな問題を幅広い文脈で取り上げて検討することを課題としています。

社会科学の理論はとても整った、大きな美しい建物のように構築されています。とくに経済学は、数理理論がその基本を担う重要な分野と認められている意味では、物理学に次ぐものと思います。私が専門とする生物学は、経済学の理論的枠組み、とくにゲーム理論から多くを学びました。

経済学をはじめとする古典的な社会科学の数理理論は、個々人が自らの現在と将来の利得を最大にするように挙動を選び、その際に基本的には他人の利得の大小には無関係であるとする仮定に立っています。しかし社会科学の実験が繰り返し示していることは、人間は嫉妬心や公共心などさまざまな傾向があること、人々は他人による評価を始終気にしていることです。そのような面を定量的にとらえることなくしては、社会の挙動を正確に理解し予測することは困難と思います。

人間性のモデルとしてどのような見方が最も有効なのかを、実験社会科学の成果を考慮にいれながら、提案していくというのが理論班の一つの目標と感じています。



班長 巖佐 庸

九州大学大学院理学研究院

ホームページもご覧ください

<http://www.iser.osaka-u.ac.jp/expss21/>

特定領域研究

発行元

大阪大学社会経済研究所

西條研究室

〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘6-1

電話 06 (6879) 8582

FAX 06 (6878) 2766

Email: expss21.hp@gmail.com